

千葉寺地区鷺谷津遺跡B区において 検出された合口甕棺墓について

福田 誠

I はじめに

千葉寺地区の調査は昭和60年度より行われ、鷺谷津遺跡B区は61年度に確認調査が、また昭和62年度の6月から12月まで本調査が実施された。住宅・都市整備公団による千葉寺地区の開発にさきだつ当センターの発掘調査は、本遺跡のほかに中野台遺跡、観音塚遺跡A区、鷺谷津遺跡A区の調査がおこなわれた。

本遺跡において、合口甕棺墓が一基検出され102号跡としたが、先例などから検討するに、火葬墓と思われる。火葬墓は一般に、一部を除いて埋納施設が貧弱であるため、偶然の発見による例が多いため、埋納形態がとらえにくく、骨蔵器の研究が先行してきたようである。近年の発掘調査数及び規模の増大は上の事情を克服し、火葬墓の研究に大きく貢献していると思うが、本例も当センターの発掘調査中に検出したもので、埋納施設たる土壌の形態も、骨蔵器たる遺物も共に遺存が良好な資料であり、紹介することにした。

II 遺構の検出状況

鷺谷津遺跡B区は、千葉市千葉寺町551-1に位置する。東京湾に流れこむ都川は沖積平野を開いたが、その水系に属する「千葉寺谷」と総称される樹支状谷のやや奥まった台地の縁辺に本遺跡は立地する。位置図は本誌17頁の第1図を参照されたい。海拔20~27mほどの低い台地だがよほど天候の条件が悪くないかぎり海が眺望できる。遺跡からは縄文時代早期末の遺物包含層、炉穴、古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居跡、方形周溝遺構などが検出された。

102号跡としたこの合口甕棺墓は、遺跡中央の094号住居跡のプランを検出した際に確認したがこの段階では黒色の不整形のプランであり、木の根が多く入っていたことから攪乱と判断し、094号跡の調査を先行させた。そのため土壌の上部約20cmを損失してしまっただが、幸い天井部は残り、ま

た住居のセクションがこれにかかっていたので土壌独自のものとはずれぬが新旧関係をおさえることができた。ちなみに、住居跡は古墳時代前期の炉を持つものである。

土壌の開口部は長軸130cm、短軸75cmの長円形で、深さ51cm、北東側に庇状の天井部をもつ。南西側の壁はゆるく立上り、上部にうつるにつれ直立していた模様である(第1図)。その形態は有天井土壌と呼ばれるものに似ている(註1)。しかし規模はそれと比べてかなり小さい。

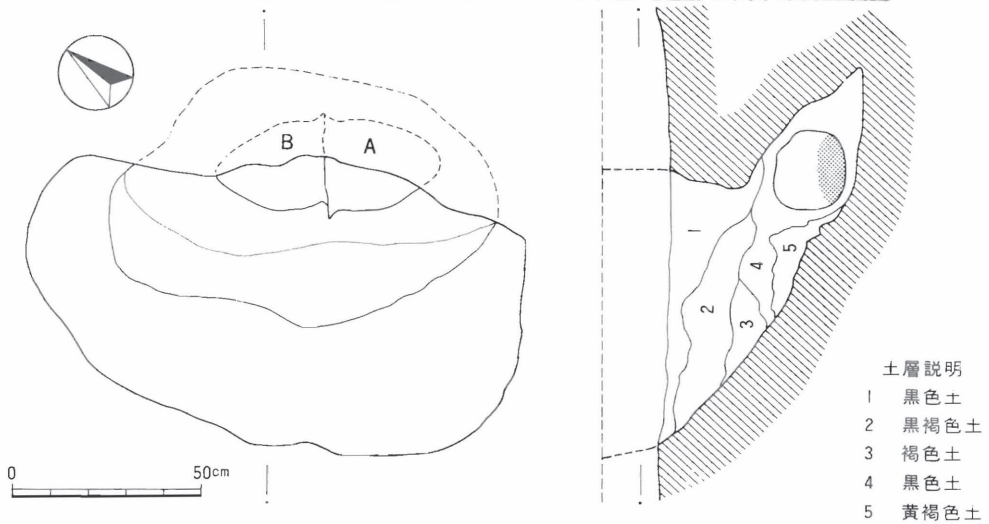
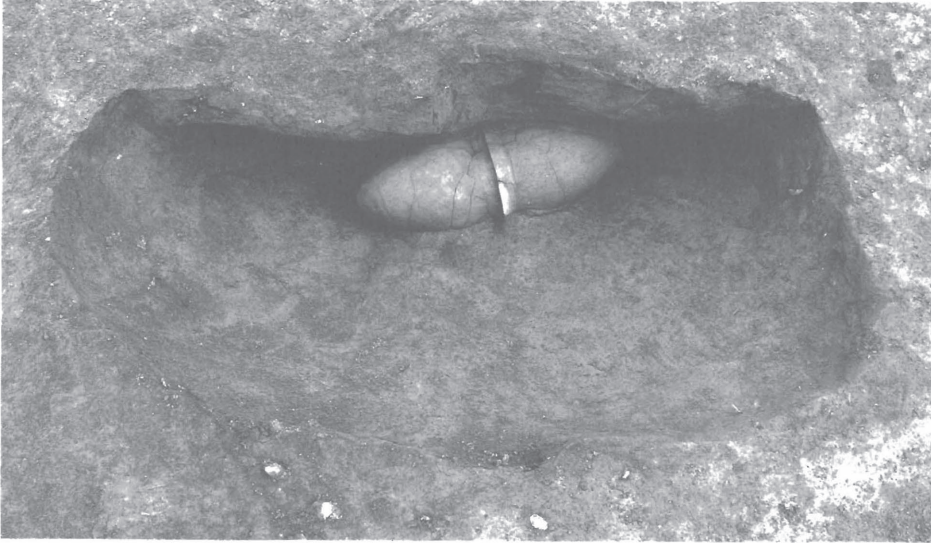
庇の下に身を寄せて2個の土師器甕が土壌底部から、倒位で口を合せた状態で出土した。甕の中には、ひびなどから浸入した細かいさらさらした土が1/4ほどたまっていた。取上げの際に観察した限りでは骨及び骨粉、墓誌となる遺物はなかった。セクションから人為的にやや無造作に埋められたことがわかり、外容器の痕跡は認められない。又覆土中には木炭粒や貝はみられなかった。

III 遺物について(第2図)

便宜上2個の甕のうち南東側のものを(A)、北西側のものを(B)とする。

土師器甕(A)完形。口径24.4cm。底径4.6cm。器高28.6cm。最大径は口縁にある。調整は口縁部がヨコナデ、胴上半部が横方向、下半部がほぼ縦方向にヘラケズリされている。器壁の薄い「く」の字状口縁部形態をもつ。色は黄赤褐色。焼成は良好だが胎土に砂粒を多く含むため表面はもろい。内部に明瞭な輪積痕をのこし特に底部と胴部の接合部は著しい。

土師器甕(B)完形。口径24.6cm。底径4.5cm。器高29.2cm。最大径は口縁にある。調整は口縁部がヨコナデ、胴上半部が横方向、中半部が斜め方向、下半部が縦方向のヘラケズリである。形態等は(A)と同じである。長年の土圧によるものか焼成時すでに歪んでいたものか不明だが、口縁が楕円形となっている。胴部に意味不明の微かな線刻が



第1図 遺構検出状況 (1/20)

ある(第3図)。

共に「武蔵型」と呼ばれる甕の形態である。甕のみのため、時期決定がいささか歯切れのわるいものとなるが、8世紀第4四半期から9世紀初頭(註2)のものと思われる。

また、共に内面の下になっていた部分は傷みが激しく、剥離しているが、かつて納められていた遺物の成分によるものか、土の成分によるものか不明である。

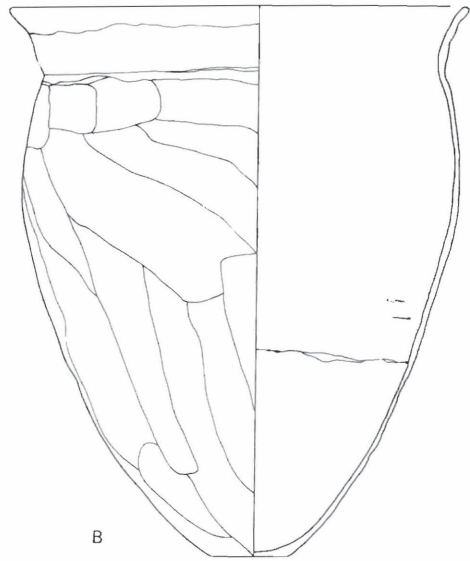
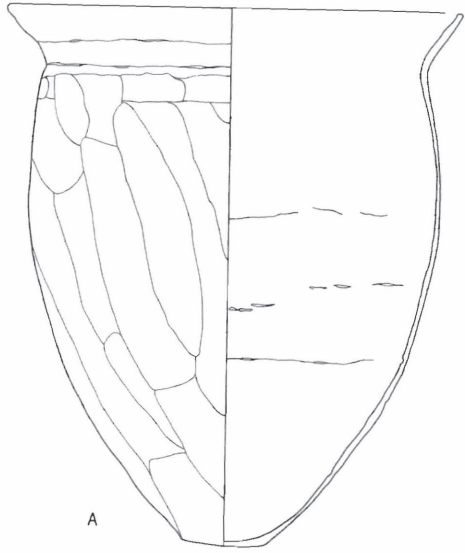
IV 問題点

埋納形態

骨蔵器埋納の方法は、前述した通り甕を倒位とし合口甕棺状にしている。この「合口・倒位」の

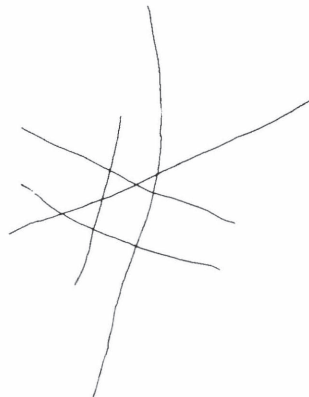
方法は東北から近畿に至るまで、少ないながらもいくつかの例が報告されている(註3)。長野県松本市(註4)や飯山市(註5)周辺にはややまとまって見受けられるようであるし、東京都八王子市でも奈良時代のもので報告されている(註6)。栃木県南河内町下野薬師寺跡から出土したものは寺域外であるが、寺院と隣接して後述する仏教との関連が気になるが、9世紀とされる(註7)。

ところでこれらと異なり、合口といってもふたと身のように正逆にあわさっているものが大変多く報告されている。東京都調布市上布田第6地点(註8)、多古工業団地内巢根遺跡(註9)をはじめ関東各地や県内でも報告はますます増えている。しかしこれらは入れ子状のものもふくめ、本稿の



第2図 遺物 (実測図は1/4)

「合口・倒位」の方法と安易に同じくできないと思う。量的にも大きく差が開いているし、「合口・倒位」であることは「合口・正、逆位」のふたと身の関係と違って左右の甕への骨の振分けの仕方や棺の密封の技術が異なると思うからである。例えば「正、逆位」であれば、身を両手でささえれば簡単に埋納できるが「合口・倒位」ということはあらかじめ接着あるいは紐でからめておくかしないと埋納しづらい等である。松本市筑摩の例では「やや粘質な土塊に保持せられて接合」とされている。



第3図 意味不明の線刻 (1/2)

千葉寺

火葬墓は仏教思想と切り離して考えられないがその点では、町名の所以にもなる千葉寺観音堂を紹介したい。当寺の縁起によれば、(註10)709年(和銅2年)池田郷に立寄った行基が弥陀観音像を精舎に安置したのがはじまりで、その後724~748年(神亀元~天平20)には寺家数十か所、脇堂18間本堂18間4面の一大伽藍をおこし海照山歙喜院青蓮千葉寺と号したという。1160年(永暦元)雷火のため灰燼と帰したので西方8丁ばかりの地に一字を建立したのが今の寺地であるとされて、隣接の遺跡名として使われる観音塚あるいは位置は不明だが引越谷という字名がその名残であるとされている。しかしながら、戦前・戦後の発掘調査成果によれば、現地に仏舎が建立された(即ち引越した)のは縁起よりかなり以前にさかのぼり、奈良時代末から平安時代初頭だとのことである。本葬が営まれた時期と重なるところがあり、大変興味深い。

V おわりに

遺跡の周辺に当該時期の火葬墓が検出された例は無く、集落についても遺物等の細かな検討をしていないので、寺との関係など多くの疑問を残している。

近年、火葬墓を群としてとらえ、支配者層の家族墓的な意味付けをする研究が進んでいるが、そういうことをふまえて逆に推測すると、ここに単独で葬られた者を僧侶であるとしてもよいのではないかと思う。

この台地とその周辺には以前から集落が営まれていた。あるとき、いかなる志からか寺が造られ、さらにあるとき、誰かが死んでこの台地に墓がたてられた。同時期に集落と寺と墓という三つの要素が存在したからといって、すぐさま有機的なつながりを求めるのは危険であるが、物語としてなら千葉寺炎上に殉じた僧の死を嘆き、海と寺の見わたせる台地の集落に厚く葬ったとしてみたいところである。残念ながら、現段階では今後の課題とし周辺の資料の増加を待って検討すべき問題であろう。

以上まとまりなく語ってきた。このことについてお世話になった多くの方々にはここに名前を挙げるができないが、厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 渡辺修一「『群小区画墓』の終焉期(2) — 「方形周溝遺溝」における埋葬施設の新例とその検討」『研究連絡誌』第14号
- 2) 埼玉考古学会「討論「奈良時代前半の須恵器編年とその後」資料」1979
神奈川考古同人会「シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題 — 相模国と周辺地域の様相 —」『神奈川考古』第14号
- 3) 石田茂作編『新版仏教考古学講座』7 昭50・9
- 4) 桐原健「松本市筑摩出土の火葬骨壺について」『信濃』7巻4号 1955・4
両角・堀内「一種の合口甕を出した松本市宮淵遺跡に就いて」『考古学雑誌』昭21・5
- 5) 飯山市教育委員会『北原遺跡』1979・2
- 6) 八幡一郎「武蔵川口村発見の一甕」『人類学雑誌』44-2 1929
- 7) 橋本澄朗「下野の骨蔵器について」『栃木県立博物館研究紀要1』1984
- 8) 滝沢亮「調布市上布田遺跡の調査」『考古学ジャーナルNo21』1983・6
- 9) 千葉県文化財センター『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』1986
- 10) 千葉市史編纂委員会『千葉市史史料編1』昭51・9

参考文献(註に掲げたもの以外)

- 長谷川厚「歴史時代墳墓の成立と展開(1)」『古代』75・76 昭58・12
「同(2)」『古代』84 昭62・9
村田・増子「南武蔵における古代火葬骨蔵器の様相」『川崎市文化財集録』15 1979
小林克「平安時代火葬墓の性格とその背景」『史叢』37号 昭61・6